

巻頭言

〈多角形〉の中での一つのミッション：4 専攻を貫く学部の使命

加藤先生が 2023 年 3 月にご退職される。加藤先生は、現代社会学部の前身、社会学部の創設メンバーである。創設の 1 年前、1985 年に準備教員として教養部に着任され、1986 年 4 月の社会学部開設に尽力された。それ以来、今日に至るまで長年にわたり本学部の教育・運営等に携わり、学部長、研究科長も歴任された。40 年近い長年のご貢献に厚く感謝申し上げます。

私は 2000 年 4 月に社会学部に着任した。加藤先生とご一緒させていただいた学部の仕事で最も思い出深いのは、2015 年からの 4 専攻へのカリキュラム改革を〈討議・実践〉した将来構想委員会での仕事である。今の学部のミッション、使命である「人がいきるつながりを創る」も加藤先生たちとの議論の中から生まれてきた。「いきる」をひらがなにしたのは、二つの意味を込めるためである。活躍して「生き活き」とできる、また、死なずに「生き抜く」。そういったつながりを創れる人材を育てる。学部で一つのミッションができたのはすごいことだよ、と加藤先生が当時おっしゃられたことを思い出す。

なぜすごいことなのか。今回、加藤先生の手書かれた「社会学部・現代社会学部のカリキュラム・ヒストリー」『中京大学現代社会学部紀要』2017 特別号を読み返してみて、それが腑に落ちた。

社会学部は「開設の段階で 5 分野 9 履修モデルという〈多角形型デザイン〉によって制度設計された。その構造は、学部の宿命として創設時から今日まで続いている。」「多角形は、裏を返せば、まとめ方、グループ化の難しさでもある。」

「2015年から始まる4専攻制は、社会学部・現代社会学の歴史のなかでもっとも大きな教育システムの変更であった。多角形をそのまま科目群として提示したような5分野や6領域、多角形を無理に3グループにまとめた3コース制とは根本的な異なる原理からなりたっているからである。」

「学を掲げる4つのカリキュラム群・教員のグループ化を基盤に専攻とした。4専攻のうち、社会学、コミュニティ学、社会福祉学は、専攻名に「学」を掲げた。国際文化も実質的には、文化人類学専攻といってもよい。このように学を明示的にグループ化の凝集原理にしたのは、学部開設以来初めてのことであった。」

4つの学を貫く、学部ミッションを生み出すことができたことは、〈多角形型デザイン〉という構造を学部の宿命として創設時から今日まで持ち続ける中では、画期的なことだったのだろうと納得できたのである。

なぜ〈多角形〉の中で、一つのミッションを生み出したのか。それは、まず「学と教員組織のグループ化が」できたからだろう。グループ化が「可能になったのは、25名から18名に教員が減るなかで、多角の数が減ってきたから」だと加藤先生は指摘する。これを踏まえれば、〈多角形〉の中で一つのミッションができた理由と、それをすごいことだという加藤先生の言葉の意味を理解することができる。

4つの学を貫く使命である「人がいきるつながりを創る」ときに、求めるつながりはただ強ければ良いというものではない。社会学の古典の『自殺論』でデュルケムが指摘したように、つながりが強すぎても弱すぎても人は自殺しやすくなる。人がいきやすい緩やかなつながりを創る。それに加藤先生は、ゼミでのラジオ活動、奄美群島での音楽文化のフィールド調査、よさこいチーム「中京大学晴地舞(はちまえ)」等で多彩に取り組みられてきた。

加藤先生がご指摘されるように、4専攻制は終点ではない。これから次の世代によって改革が続いていく。「時代を勘案しつつ、学部のもてる人

的資源を再配分しながら、よりベターなカリキュラムとは何か。その難問に答えるのは、次の世代の責務である。」「学部を担う新しい世代の討議と実践に期待したい。」という加藤先生のご期待に答えられるよう、われわれも〈討議と実践〉により一層精進していくことをここに誓いたい。

個人的には、私は2021年4月から学部長になり、困ったり悩んだりしたときは何度も、学部長・研究科長のご経験豊かな加藤先生にご相談させていただいた。おかげさまで何とか今までやってこられたと思う。本当にありがとうございました。

いつまでもお元気でいてください。今後とも本学部にご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

現代社会学部長 大岡 頼光